論 文 の 内 容 の 要 旨

論文題目　　大連における公園・緑地・海浜リゾートの展開に関する研究
―帝政ロシア・日本の統治時代から中華人民共和国の今日まで―

氏　　名　　張丹

中国における持続可能な発展と地球環境問題との調和は、21世紀初頭の現在、すべての分野で取り組まなければならない緊急の課題である。特に、1970年代末期から実施された改革開放政策の結果、この10年間、中国は高度経済成長を遂げており、それに伴い、都市化と市街地の膨張が急激に進行し、土地利用のあり方、都市の交通・住宅・環境衛生、さらには都市の景観と潤いなどの諸問題が深刻となっている。

中国東北地方の海浜都市である大連は帝政ロシア、日本統治時代を経て、中国における重要な観光都市である。都市の特色は、港湾のみならず、豊かな山林、山並み、海や海浜の地形条件が、それぞれにまとまりあった空間を構成している要素にある。それらが大連の独自な都市景観を形成している。

本研究は、大連における都市計画発展史の全体を俯瞰した上で、“公園緑地”に焦点を当てて、その概念の創設、実現された公園の建設経過とその背後にある考え方に対する考察、都市景観の形成の経緯、さらには 21 世紀にあたってストックとして残されている公園緑地やオープンスペースの継承発展、解明した。

1898 年、帝政ロシアはダルニー港と付属都市の建設に着手した。これは大連の街並みを形成する嚆矢であった。帝政ロシアの計画では、港湾、道路、河川、区画、鉄道、墓地などと共に、広場的空間(10 箇所)、公園(6 箇所)、サムソンスキ並木道が決定されていた。これが大連初の公園緑地計画である。帝政ロシアの建設者は、自然の特徴を深く読み込んで、適切な公園緑地を導入する計画思想は後の大連の緑の形成に大きな影響を与えた。それにより、1898 年後の 6 年間は、ダルニー市（後の大連）における公園緑地計画・建設の萌芽期と考えられる。

1905 年から 1945 年敗戦まで、日本人の技術者は関東大震災、函館大火の経験の反省を生かし、諸外国の先進的な例を参考に、活用し、大連都市公園緑地計画の基盤整備期に携わった。1941 年、市街地の無統制の拡大と乱開発を防ぐため、都市北部における臨海工業ニュータウンの計画と南部馬欄河区域の住宅地の整理を目的の「大連市街計画」が策定された。計画内容は港湾の部、鉄道の部、道路及び水路の部、用途地域の部、公

園の部、学校用地の部などからなり，系統的な公園計画が街路、用途地域と対等の位置をようやく獲得したことを示している。計画設定区域内の公園緑地の計画の特徴は、広幅員道路や河川沿いの長い線路型の緑地帯を計画、それに大公園、近隣公園、児童公園等、様ざまな公園の配置，その公園と広幅員道路、河川、学校とが連動している系統性ある公園緑地を形成しているという点にある。その計画の近代性は当時としては画期的なものであった。南部馬欄河整理区域の計画には、住宅用地の土地整理と公園拡張、河川管理を合わせて、複合性高い土地整理・開発の地区計画思想、新しい都市の緑の軸線を形成しようとする計画方針が読み取れた。

中華人民共和国の建国以降、大連における公園緑地計画、事業は 1970 年代まで、何度かの政治情勢の動揺により挫折された。1980 年代から、都市の規模の拡張に伴って、都市計画の範囲も大きくなった。公園緑地の運営・管理は着実に定着し、緑の対象は市街地地域の公園から市の全体に幅広く、多様な展開をみせはじめていたことは明らかである。大連は風光優美の海浜を持つため、百年前に、南満州第一の海浜リゾート、海浜浴場などを形成した。その基礎をとし、南部海浜風景区は発展してきた。都市の観光拠点と顔になる。大連湾側の臨海港湾用地は、国の東北振興戦略の推進に伴って、新しい発展のチャンスに直面している。都市の発展と緑の創造とは、どのように調和するか、今後大連は直面しなければならない課題である。

それらを踏まえ、今後のあるべき生態都市の将来像を構想し、水と緑の育成計画を促進すること、緑化施策のあるべき姿、特に緑と都市の共生による新たな取組みの可能性などについて検討した。